

北野 達 提出 学位申請論文

『古事記神話研究―天皇家の由来と神話―』 審査要旨

論文の内容の要旨

北野達提出の論文『古事記神話研究―天皇家の由来と神話―』は、二部構成で全十七章、六七〇頁から成る。『古事記』神話を、天孫降臨神話を軸として体系化された神話であると捉えた上で、神話相互の関連性を重視しつつ解釈して行くという方法によって書かれた論文である。

第一部「『古事記』の成立」は三章より成る。『古事記』は、『日本書紀』天武天皇十年条にみえる「帝紀及び上古の諸事」を基礎資料として、その他の文献や伝承を稗田阿礼が誦習することによって「討覈」（尋ね調べて究める）したものが「勅語の旧辞」であり、それを「撰録」したのが『古事記』である、とする。

第一章「稗田阿礼の誦習―カタリの方―」は、『古事記』の成立過程を、稗田阿礼の「誦習」の意義を中心に考察したものである。阿礼は、文献を良く読み、伝承を心に記してそれを誦習した。カタリを繰り返すことで、物語を洗練化させ、豊かな彩りを加えていく。阿礼の誦習とは、カタリの方で言葉を組み立て、創造する行為であったとする。

第二章「『古事記』の始祖記事と「帝紀」」では、『日本書紀』と『古事記』との質の違いを検討するに際し、従来分析がなされてきた氏族記事に関し、新たにこれを始祖記事と祖先記事とに分けて分析することで、より『古事記』と『日本書紀』との差異を明確化しようとした。その分析結果を元に、『古事記』の原資料は『日本書紀』天武十年三月条に記された「帝紀及び上古の諸事」であったと結論付ける。

第三章「『古事記』の成立―『古事記』と「帝紀及び上古の諸事」」では、第二章で『古事記』の原資料とした「帝紀及び上古の諸事」は系譜と物語・伝承が一

体となったものであるとし、これが序文で言うところの帝皇日継・先代旧辞にあたり、これを阿礼が誦習することを通して討覈をしたものが勅語の旧辞であり、そして安万侶が撰録して『古事記』が完成したと結論付ける。

第二部「『古事記』神話論」では、第一部で論じた『古事記』成立論を前提とした上で、『古事記』神話の統一性、体系性について各論を通じて検討したものである。『古事記』神話の中心は天孫降臨神話にあり、神勅の連続によってそれが果たされていくと説く。

第四章「『古事記』神話冒頭部のヨミ」は、アメノミナカヌシの神からイザナミの神の誕生までの意味を考える。はじめの三神は、後の神々出現の力を神格化したムスヒの神を出現させることに意義があり、四柱めのウマシアシカビヒコゾの神以降は、萌え上がるものが変じて徐々に実態を持つ神として出現して行き、イザナキの神・イザナミの神に至ってその完成をみるとする。

第五章「高天原に成りませる神」と「萌え出る物に困りて成りませる神」は、

『古事記』の神出現に纏わる表現、「次」「成神名」などの例を詳細に検討することで、前章の結論を補強した論。

第六章「隠身の神」も、「隠身」の意義を検討し、イザナキの神・イザナミの神と「隠身神」との対比をすることで第四章を補強した論となっている。従来訓義に揺れのある「隠身」を「カクリミ」と理解し、身体完備のイザナキの神・イザナミの神に繋がる前提としての存在であると説く。

第七章「イザナキの神・イザナミの神の国作り―修理固成をめぐって―」において、イザナキの神・イザナミの神の役割は、葦原中国を修理固成することであったとし、従来問題とされ、未だ決着を見ない「修理固成」の及ぶ範囲を、アマテラス大神・スサノヲの命の生成によって終わると論じた。

第八章「ヨミの国―死者の国の変貌―」において、『古事記』の「黄泉国」は、日本古来のヨミに漢語「黄泉」が浸食することで出来た複合的な異界であるとする。黄泉国神話が三貴子誕生を導き出す神話として位置付け得るのも、この複合

化によるものであると見る。

第九章「誓約神話の形成とオシホミミの命」では、誓約神話を、皇祖神と天皇との繋がりに密接に関わる神話であると捉える。オシホミミの命の名前、役割などを『古事記』と『日本書紀』の各伝とで比較検討をし、改めて『古事記』神話における皇統へのこだわりを確認した。その結果、アマテラス大神―オシホミミの命系と、タカミムスヒの尊―オシホネ系とに分類し、モノザネの交換・非交換の要素も併せて考察し、アマテラス大神―オシホミミの命系の成立が天孫降臨神話の成立と直結する問題を孕んでいると考察した。

第十章「天真名井」では、誓約神話における『古事記』『日本書紀』の「天の真名井」の名称の相違について検討し、その相違が第九章で論じた二系統の相違とも重なり合うものであることを確認したものである。

第十一章「スサノヲの命の暴虐と追放―スサノヲの命の暴虐と大祓―」は、スサノヲの命の高天原からの追放は大祓式の祭儀神話であり、その成立は天武朝以

降であったと説く。以下第十二章・第十三章も併せ、スサノヲが天神による神勅の連続から外れていくことを論じる。

第十二章は「根の堅州国」とスサノヲの命―死の国としての「根の堅州国」―である。スサノヲの命は、イザナキの神の海原統治の神勅を拒絶することによって追放される。スサノヲの命のネノカタス国統治には正統性はなく、スサノヲの命の神勅によるオホクニヌシの命の葦原中国統治の正統性は不完全なものであった。ここに国譲り神話が必要だったゆえんがあるとする。

第十三章は、本論文全体に関わる「神勅の伝来」を題として論じている。修理固成条の「天神諸」からアマテラス大神の降臨の神勅に至る神勅の連続は、『古事記』神話の主軸となるものである。これによって生成したアマテラス大神は、イザナキの神の神勅によって高天原の主となり、ここに天神諸↓イザナキの神↓アマテラス大神の神勅の連続が提示されていると説く。

第十四章「天の浮き橋―天皇家の由来と「天の浮き橋」―」では、第十三章で

論じた「神勅」を受ける場として位置づけられたのが「天の浮橋」であると説く。

第十五章「『古事記』天孫降臨神話の形成―伊勢神宮の創始と大嘗祭―」は、本論文が『古事記』神話の中心を成すと位置づける天孫降臨神話について論じたものである。『古事記』『日本書紀』の天孫降臨神話は、タカミムスヒの尊系と、アマテラス大神系とに二分される。本章ではこれまでの主たる先行研究を批判的に検証しつつ、タカミムスヒの尊系は大嘗祭と関わり、アマテラス大神系は伊勢神宮の創始と関わっていることを確認した上で、『古事記』神話は、神勅の授与を説くアマテラス大神系神話を中心にタカミムスヒの尊系神話を取り入れていると論じる。

第十六章は「天神」を題とする。『古事記』神話は、神勅の連続を主軸に、アマテラス大神の神勅を葦原中国で実現するのが「天神御子」であることを説いた。神武天皇は、「天神御子」の資格を得ることによって初代天皇となることができたとする。第二部全体のまとめにも該当する章である。

附篇として、第十七章「日本神話の異郷」を載せる。日本神話においては、異郷を訪れた者と、異郷の娘との間に生まれた子が人間世界の主の資格を得るといふ展開を持つ。異郷は、人間世界においては閉じられているが、人間存在の根源的な地として必要な、まさにハハの国であったと論じる。

論文審査の結果の要旨

本論文『古事記神話研究―天皇家の由来と神話―』は、『古事記』神話を、統一した体系を持つ神話として捉え、神話の展開、各神話の連続性を重視しつつ、従来見解の定まっていなかった個々の問題の解決を通して、『古事記』神話の本質に迫った論である。

第一部「『古事記』の成立」は、全三章からなる。第二部の神話解釈の前提となるものであり、『古事記』序文の解釈を通して、稗田阿礼の誦習から太安万侶

の撰録に至る道筋を検討する。その結果、稗田阿礼は誦習することによって討覈（尋ね調べて究める）したのだという独自の見解を示し、それゆえ『古事記』の成立には語りの力が作用していると説く。

本論文の『古事記』成立論の特徴は、稗田阿礼の役割を最大限に重視している点にある。従来天武天皇の政治的意向、若しくは太安万侶の文学的営為によって『古事記』は完成を見、所謂誦習作業を行った稗田阿礼はその内容には関わっていないとされてきたのに対し、本論文では、阿礼はカタリの力によって誦習することで討覈をした、即ち『古事記』の内容を整理統合し、体系的に神話を纏め上げたと捉える。近年の『古事記』序文の把握とは大きく異なり、独自の見解を示しているという点において、評価される場所である。但し、誦習を通して討覈するというのは、具体的にどうということなのか、また、カタリの力というのはどういふものであるのかについては、不明瞭な点が残ると言わざるを得ない。稗田阿礼にそれだけの役割・権限が与えられ得るのかどうか、またいかなる判断基準

をもって現行『古事記』の内容に纏め上げていったのか等も疑問である。誦習することで神話体系を作り上げていくということに対する具体的なイメージ、及び天武天皇、元明天皇、太安万侶の役割について更なる検討が求められる。カタリの方が物語内容にどのように影響をもたらすのか、例えば『古事記』の文芸性ということに関わる問題であるのかどうかなどについても、中巻・下巻を含めた上で考察されなければならないものと思われる。

第二部「『古事記』神話論」では、『古事記』神話を、統一した体系を持つ神話としていかに読めるかを主題とし、常に『古事記』神話全体を念頭におきつつ各文脈や神話を考察し、論じている。その論証方法は、『古事記』内部の徹底した用例調査、『日本書紀』との細部にまで互る比較、先行研究の再確認と批判など、内容に応じて縦横無尽に論じられており、各論考が極めて重厚な論となっている。また、その結果、従来の研究史に加えるべき新たな見解が導き出されている。いくつか具体例を挙げるならば、それまで区別されることのなかった『古事記』

『日本書紀』の氏祖記事を、始祖記事と祖先記事とに分類し、両書の性格の相違を明確化している。また、『古事記』の神出現の表現につき、「次」「成神」による表現方法を分析し、神話冒頭の三柱の神、別天神、神世七代の神々がどの場所で、何によって出現したのかを考察し、それぞれの神々の役割・位置づけを明らかにした点も、従来の解釈に新たな視点を導入したものととして評価し得る。次に、アマテラス大神とスサノヲの命の「ウケヒ」によって出現し、後にホノニギの命の父神として位置付けられるオシホミミの命について、『日本書紀』との詳細な比較を行い、オシホミミの命系とオシホネの尊系とに分け、オシホネ系の場合にはアマテラス大神との関係が窺えず、スサノヲの尊若しくはタカミムスヒの尊との繋がりがより強いことを指摘した点も重要である。

研究史の再検討や、自身による独自の分析によって、未だ解釈の定まらない問題について論じたものについても、注目すべきものを多く含んでいる。例えば「天地初発之時」の訓を『古事記伝』の説くごとく「アメツチハジメノトキ」と

結論づけたのは、本居宣長への回帰ではなく、宣長以降の研究を踏まえ、その後の神話展開の理解を絡めた上で出された結論である。天神による「国土の修理固成」の命令の及ぶ範囲をアマテラスとスサノヲの誕生までとする見解には妥当性が見られるし、「隠身」の訓を「カクリミ」と訓じようとする点なども含め、これまで定説の見られなかった問題に関しても果敢に論じ、独自の結論が導かれている。しかもそれぞれの論が自身の『古事記』神話論の一部として機能している点において一貫性があり、破綻がない。

但し、本論文における神話文脈理解には次のような問題点も見受けられる。本論文の各所には『古事記』神話の細部の記述について、破綻・亀裂・矛盾という言い方をするとところが見られる。体系化がなされる一方で、新たに構成され、組み立てられる中で生じる歪みとして捉えているようであるが、それらは矛盾ではなく、意図を持って記された記述である可能性もなお残されているのではないか。破綻や矛盾であるということと済ませてしまうのか、破綻や矛盾を抱えるところ

に『古事記』の本質があると見るべきなのか、或いは矛盾であると捉えること自体に読み誤りがあり、我々が気付かない意義がそこには存在しているのか、なお検討を要するものと思われる。

本論文は、『古事記』成立論、及び神話論において、述べてきたような今後の検討課題を含み持つものではあるが、『古事記』神話の総合的研究のひとつの達成を示すものとして研究史上に位置付けられるものである。また、近年『古事記』の内部検証が徹底的に行われ、作品論的研究方法に行き詰まりを見せている中にあって、本論文の各論考は、基本的な資料操作に基づく研究がまだ充分ではなく、検討の余地を多く残しているという現状を再認識させ、『古事記』研究の未来を拓く意義を有するものとなっているのは確かである。

よって、本論文の申請者北野達氏は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認める。

平成二十八年九月三十日

主査 國學院大學准教授 谷口雅博 ①

副査 國學院大學教授 針本正行 ①

副査 國學院大學教授 豊島秀範 ①

副査 群馬県立女子大学教授 北川和秀 ①

北野 達 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十八年九月三十日

学力確認担当者

主査	國學院大學准教授	谷口雅博	印
副査	國學院大學教授	針本正行	印
副査	國學院大學教授	豊島秀範	印
副査	群馬県立女子大学教授	北川和秀	印